

山 本 博

「びわさわ」と言う文字を目で追う私の中に遠い過ぎし日が甦がえて来る。最初は、おぼろげながら、次第に、はっきりと形を成して広がって来る。

遠く竹藪の中に見える麦藁屋根の家、菜の花畑の中へ消えて行く細い道、近くには、日留りに咲いた小さな花、いつも通い馴れた学校へ通じる細い道、その道が、山蔭へ消える所に立っている一本の桜の木、それらは全て馴れ親しんだ風景であった。

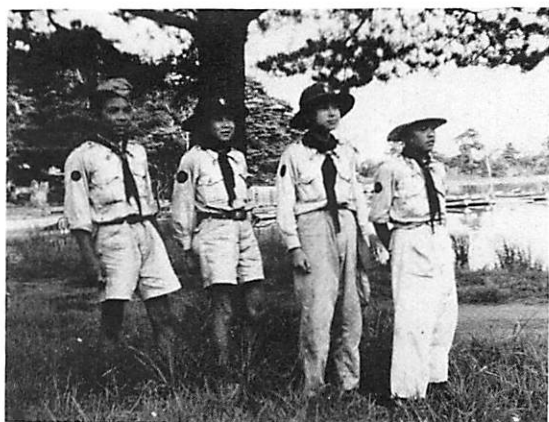
その日私は、父の前を歩いていた。就職の為、まだ見た事もない東京への出発の日である。熊笹の生えている、小さな池の辺で、私は立止って振り返った。此の場所が住み馴れた我が家の見える最後の地点であった。父も腰を伸して立止った。野良着のままでカゴを背おっている。その中には私が東京での生活に必要な荷物が入っている。今まで、父と二人きりで出掛けたと言う様な事はなかったが、今日は、珍らしく駅まで送ってくれる事になった。私は、杉木立の中に見える我が家を見ながら「来年の正月までお別れだ」と心の中でつぶやいた。不思議と、淋しいとか、悲しいと言う感情は、わいて来なかった。父とは駅で別れた。改札口を出る時「じゃ行きます」と言って私は、父の顔を見た。「元気でな」と、一言照臭さそうに言った父の顔が、ひときわ大きく見えた。列車は混んでいて、体の小さな私は、大人の中へ入って押し潰されそうになりながらどうにか外が見え

る窓の近くへ行く事が出来た。周の人々の体の間からホームが見えた。ホームの柵の所に父が居た。カゴを背おって、柵にしがみ付く様にしながら、列車の中の私を捜している。目を血走しらせ、必死になって捜している。「此々に居るよ」と合図の手を振ったが、父には見えなかった様である。列車がゆっくりと動き出した。私は周の人々の体の隙間から父を見ていた。父は尚も私を捜し続けている。列車の動きを追う様に、柵づたいに二、



こゝから多くの友人が巣だった思い出の駅(守山駅)

三步かけ出した。カゴが、背中でゆれている。しかし、私を見付ける事は出来なかった。父は諦らめた。その瞬間父の顔が、ゆがんだ様に見えた。私は目のすみに父のその顔を見ながら、のど元まで、込み上げて来るものを必死でこらえた。此の別れが、父との最後の別れになった。私が東京へ出て半年位過ぎたある日、「チチキトク」の電報が来た。すぐに帰る用意をしている所へ、双たび電報を受取った。「チチシス」の四文字、読んでいるうち、字がかすんで来る。駅の柵にしがみ付いて私を捜している父、列車が走り出し、私を見付ける事が出来ず、諦らめた時の父のゆがんだ顔今でもはっきりと、思い出す事が出来る。今、私も、中学生の息子を持つ一人の父親として、あの時の、父の心を知った思いである。



左より 山本博・吉田彰・藤田実・熊田孝



3 年 D 組